

後水尾サロンと書文化形成の担い手

田中春菜

はじめに

一章 後水尾院サロン

第一節 後水尾院サロン

第二節 後水尾サロンの書にまつわる活動―後水尾院の文化活動を軸に―

二章 中院通村

三章 藤谷為賢

おわりに

はじめに

本稿は、後水尾院（一五九六―一六八〇）を中心とした後水尾サロンに見える書の活動を概観していくと同時に、その構成員のなかで着目される機会の少なかった中院通村（一五八八―一六五三）と藤谷為賢（一五九三―一六五三）を書文化形成を担った主要人物として取り上げ、これらの人物についての先行研究をまとめ、今後の研究の意義や目的を見出すためのものである。

江戸時代初頭に活躍した人物に着目した先行研究を確認していくと、寛永の三筆と称される近衛信伊（一五六五―一六一四）、本阿弥光悦（一五五八―一六三七）、松花堂昭乗（一五八四―一六三九）、寛永の三筆と比肩される烏丸光広（一五七九―一六三八）、大名茶人の小堀遠州（一五七九―一六四七）、古筆家初代の古筆了佐（一五七二―一六六二）、信伊の養子となった近衛信尋（一五九九―一六四九）らが大きく取り上げられ、その名を留める。

一方、後水尾サロンに目を向けてみると、その構成員とされる人物のなかこれまで書道史上で大きく取り上げられてきた人物が決して多くないことに気づく。今回取り上げる通村と為賢は、これまで書道史で着目されることは少なかったが書文化形成の担い手の一人として注目すべき人物である。

通村は後水尾歌壇の中核を担い、当時を代表する歌人の一人として著名である。同時に能書や古筆鑑定などとして知られる。例示すると、伝藤原公任「十五番歌合」（前田育徳会蔵）に見るような古筆の補写、「十五番歌合」の模写本（個人蔵）の制作、『源氏物語手鑑』（和泉市久保惣記念美術館蔵）のような調度手本に見られる幹旋と詞書の書写、短冊や懐紙の揮毫、伝藤原行成「関戸本古今集」の零本（個人蔵）の奥書に確認されるような古筆鑑定など、歌壇の主格としての活動環境を踏襲するかのような多種多様な書の活動を行っている。これまで通村と同じく後水尾歌壇の主格を担った人物のうち、光広は大いに注目されてきたところである。通村に着目することは希薄にあったが、江戸時代初頭の書文化形成を担った一人として着目するに値するものといえる。

為賢は、これまで着目されてこなかったが、冷泉家出身とあって藤原俊成や藤原定家など自身の家系にまつわる古筆鑑定を盛んにおこなっている。また、古筆や茶道具の幹旋、掘り出しの行為なども行っており、目利としての為賢が浮かび上がってくる。近世初頭の古筆をめぐる交流において橋渡しのような存在であったことが伺えるほか、こうした活動からは定家流行の重要人物であったと考えられる。

本稿では、後水尾サロンの構成員に着目した研究においては、これまで大きく

取り上げられることなく見過ごされてきた通村と為賢を取り上げて、主な先行研究を概観し、今後の研究課題を整理していく。また、これまで書道史研究では、後水尾サロンにおける文化活動について述べられることは少なかった。この時代に行われた書の活動は、後水尾院を中心に行った文化活動、特に歌と茶と複雑に絡み合って展開されていく。よって、後水尾サロンについての概要とそこで行われた書の活動も確認しておきたい。

第一章 後水尾院の仙洞サロン

本章では、後水尾サロンの概要とそこで行われた書をめぐる活動を、後水尾院の文化活動を中心に確認する。これまで書道史研究では、後水尾サロンについて語られることは少なかった。しかし、そこで展開された書をめぐる活動は、後水尾院の行った文化活動と複雑に連鎖しながら展開している。特に書は、歌道と茶道と強い結び付きを持つ。歌道では歌会における懐紙や短冊の揮毫、古典籍研究における禁裏での歌書の書写や補写活動、禁裏文庫の蔵書整理などが挙げられる。時にこれらは、調度手本制作や茶席での鑑賞の内容に影響していく。茶道では茶席における墨跡や古筆の鑑賞が挙げられる。公家の茶会では古筆の鑑賞が盛んに行われた。後水尾院の文化活動は周囲の人々の書の活動へ連鎖していったのである。

以上のことをふまえ、一節では後水尾サロンの概要を確認する。二節では、後水尾院の書をめぐる活動にまつわる先行研究を概観することにした。これにあたって、書と強く結びつく歌道と茶道という視点からも確認していくこととする。

なお、書道史研究でサロンという言葉を使用することはないが、文化研究では文化人の交流の場を指す言葉として用いられることから、本稿でもそれを踏襲する。^①

一節 仙洞サロン

後水尾院は、後陽成天皇（一五七一―一六一七）の子で、慶長十六年（一六一一）に即位する。寛永六年（一六二九）に突然第一皇女興子内親王（一六三十一―一六九六）に譲位するが、後光明天皇（一六三三―一六五四）、後西天皇（一六三七―一六八五）、靈元天皇（一六五四―一七三二）の四代にわたって五十一年、院政を行った江戸時代初頭の朝廷の要だった。後水尾院についての研究は、中村直勝氏『後水尾天皇御紀』（旧嵯峨御所大本山大覚寺、一九五一年）、酒井信彦氏『後水尾院当時年中行事』の性格と目的^②、『東京大学史料編纂所研究紀要』七（東京大学、一九九七年）、熊倉功夫氏『後水尾天皇』（中央公論社、二〇一〇年）、日下幸男氏『後水尾院の研究』勉誠出版、二〇一七年）など枚挙にいとまがない。

ここで後水尾サロンについて確認したい。

後水尾サロンとは、その名の通り後水尾院とその周囲の公家中心のサロンである。書道史研究上で著名な人物を構成員として挙げるならば、光広、通村、信尋、近衛尚嗣（一六二二―一六五三）、近衛基熙（一六四八―一七二二）らがいる。サロンには、武家や町衆、僧侶も加わっており、昭乗、了佐もその一員であった。

江戸時代初頭のサロンに関する研究は、川島将生氏『中世京都文化の周縁』（思文閣出版、一九九二年）、熊倉功夫氏『熊倉功夫著作集』第五卷「寛永文化の研究」（思文閣出版、二〇一七年）などがある。両氏は、寛永文化の特徴としてサロンを取り上げている。川島氏は、サロンには人が集まり多種多様な文芸活動が行われたこと、公家、武家、町衆、僧侶など様々な階層の人々がサロンの構成員であると同時に、複数のサロンの構成員として連鎖していたことを特徴付ける。熊倉氏は「系譜を異にする文化が個々に独立した文化集団に依拠するのではなく、互いに重なり合って一箇の文化として現象化した現状を意味している^③」と性格付け、総合的であることに価値があるとした。

古筆に採るならば、もともとは公家社会で尊重されてきたものが、武家や茶人、町衆へ持ち込まれ多くの人々の間で愛好される。茶席では、主に掛物として尊重された。他方、古筆手鑑では、公家や歌人の書跡だけでなく、武家や僧侶といった多階層の書跡が一同に貼り込まれて帖を形成した。このように江戸時代初頭のサロンは、公家、武家、町衆、僧侶などそれぞれで構成されていた場が互いに入り混じり、新たな文化が書、茶、絵、連歌など多方面で生み出されていく性質を持っていた。

後水尾サロンに関する研究は、熊倉氏『熊倉功夫著作集』第五卷「寛永文化の研究」に詳しい。熊倉氏は、徳川幕府が「禁中並公家諸法度」³⁾を施行し、禁裏公家の活動を文化の面に限定したこと、後水尾院の反幕志向や文芸志向が相まって、書、和歌、古典講釈、茶道、修学院の建造、立花、絵画など諸領域に渡った文化活動を盛んに展開していく経緯を明らかにした。また、後水尾サロンは、最大の規模を誇り、文化の中心であったとする。

特に、後水尾院が和歌に熱心であったことは著名である。多くの歌会や添削指導などを行い、基礎知識となる『源氏物語』や『伊勢物語』などの古典籍研究にも熱を注いだ。本田慧子氏は「後水尾院の禁中御学問講」「書陵部紀要」(第二九号、宮内庁書陵部、一九七八年)で「禁中並公家諸法度」の第一カ条「禁中御学問講」の内容の変容について明らかにし、後水尾が最も重視した学問が和歌であったことを指摘している。

息子の後光明天皇へ宛てた訓戒書『後水尾天皇御教訓書』(東山御文庫所蔵、東伏見宮家編『皇室史の研究』(東伏見宮家、一九三二年)には、以下のように記されている。

一、御芸能の事は禁秘抄に委く載られて候へども、今の世に候へば、和歌第一に御心にかげられ、御稽古あるべき事にや。先和国の風義といひ、近代

代ごとにもてあそばる、道也

寛永二年(一六二五)には、細川幽斎(一五四三—一六一〇)の弟子であった八条宮智仁親王(一五七九—一六二九)から古今伝授を受け、明暦三年(一六五七)、寛文四年(一六六四)には自身が古今伝授を行う。この時代に古筆が流行したことは周知の通りであるが、後水尾院の歌道復興志向がその一つの起因と考えられる。

これらの先行研究を見るに、後水尾サロンは江戸時代初頭の文化形成の中心であった。サロンの性格上、その枠組みを限定することは難しいが、江戸時代初頭に行われた文化活動の起点であったといえる。

二節 後水尾サロンの書にまつわる活動―後水尾院の文化活動を軸に―
本節では、後水尾サロンの書をめぐる活動を、特に結び付きの強い歌道と茶道という視点を含めながら確認することにした。

書道史研究では小松茂美氏による『日本書流全史』上下巻(講談社、一九七〇年)、『古筆』(講談社、一九七二年)、『日本書蹟大鑑』第一巻―第二十五巻(講談社、一九七八―一九八〇年)、『日本の書』一〇「寛永の三筆」(中央公論社、一九八一年)、『烏丸光広』(小学館、一九八二年)、増田孝氏『日本近世書蹟研究史』(文献出版、一九九六年)、増田孝氏・日比野浩親氏編『慶安手鑑』(思文閣出版、二〇一七年)など、後水尾サロンの構成員を取り上げた研究、書跡の公開が重ねられてきた。『中院通村日記』や『隔冥記』などの日記資料は日本書道史解明の資料として断片的に使用された。

近年では、高田智仁氏「江戸時代日記史料にみる近世宮廷社会の古書跡の諸相」(公益財団法人日本習字教育財団学術研究助成成果論文集)第一号、日本習字教育財団、二〇一五年)で『葉室頼業記』、『時慶卿記』など宮廷文化人の日記資料に見える古典籍が紹介され、古典籍の尊重傾向や愛蔵の一端が明らかにされている。書道史研究において使用されることの少なかった資料を呈示した点で貴重なものである。

しかし、これらは後水尾サロンという認識を持つて研究されているとは言い難い。また、後水尾院や、本稿で取り上げる通村、為賢など、多くの人物については、概要や書の資料を示すに留まり、具体的な追及はされてこなかった。よって、本稿では、後水尾院を主軸にしなから、後水尾サロンの書にまつわる活動を確認しておく。

後水尾院自身、能書として活躍する。小松氏『日本書流全史』上巻では、「本朝古今名公古筆分流」で中院流と近衛殿流、「古筆流分」で後水尾院流に名が見える。小松氏『日本書蹟大鑑』第十八巻（講談社、一九七九年）では、中院流や信伊の書などの影響を指摘される。田中潤氏「親王・門跡の家職としての書道」（『近世の天皇・朝廷研究―第一回成果報告集―』（朝暮研究会、二〇〇八年）では、後水尾院の形成や「勅伝書流」の前史が世尊寺系の持明院による伝授に遡及すると述べられるなど、書流伝授の系譜に着目した研究も行われている⁵³。

書道史研究では、江戸時代初頭の古筆愛好を取り上げる際に後水尾院の活動が度々用いられてきた。例示すると、小松氏『日本書流全史』上巻では、伝空海「狸毛筆奉献表」（醍醐寺蔵）の巻末の跋文から、後水尾院が二行を分割して宮廷に留めおかれたことが挙げ、江戸時代初頭の古筆が断簡とされていく背景を述べている。また、『藻塩草』（淡交社、二〇〇六年）、増田氏・日比野氏編『慶安手鑑』など手鑑に着目した研究では、禁裏で行われた手鑑制作を取り上げ、手鑑当初の様相などに言及されている。

後水尾院の茶会や歌会、歌書の学びや禁裏の蔵書史と関連する書の研究は、他の分野からアプローチがされている。

茶会における書跡鑑賞については、谷端昭夫氏『公家茶道の研究』（思文閣出版、二〇〇五年）がある。谷端氏は茶道研究において後水尾院の茶会を取り上げ、親近者が多いこと、書院を用いること、芸能が伴うことなど、公家独自の宮廷文化を象徴する茶文化形成の軌跡を述べている。その中で、当初は南宋画や墨跡などが多く使用されていたが、次第に宮廷文化を尊重する古筆を用いることが

増えていったことに言及する。書道史研究では後水尾院に限定すると、そのような研究は多く行われてきていない。江戸時代初期に見える茶掛の古筆を調査する際などに『隔冥記』などの日記資料はしばしば用いられているが、後水尾院の茶会における書跡鑑賞に着目したものは言い難い。

歌会においては短冊や懐紙の挿毫がある。江戸時代初頭の公家らによって挿毫された短冊や懐紙は多く現存していて、小松氏『日本書蹟大鑑』や『短冊手鑑』（講談社、一九八三年）など、その書跡は多く公開される場所である。歌道研究では、後水尾歌壇に着目した研究が盛んに行われている。鈴木健一氏「後水尾歌壇の成立と展開」（『国語と国文学』東京大学国語国文学学会、一九八六年）、大谷俊太氏『和歌文学講座第八巻 近世の和歌』（勉誠社、一九九六年）、高梨素子氏『後水尾院初期歌壇の歌人の研究』（おうふう、二〇一〇年）、日下氏『後水尾院の研究』など、後水尾歌壇の展開に着目しつつ禁中御和歌会の内容、和歌指導や古典籍の講釈の内容、その際の構成員の変遷などが解明された。これらの研究では、能書として知られる光広、通村の生涯や後水尾歌壇での役割についても明らかにされており、書道研究においても貴重な研究である。

歌書を中心とする学びや禁裏の蔵書史的な研究としては、酒井茂幸氏『禁裏本歌書の蔵書史的研究』（思文閣出版、二〇〇九年）が重要な研究である。酒井氏は、後水尾院の文化活動が禁裏での歌書や物語の書写活動とその収蔵の軌跡と重なることに着目しながら禁裏文庫史について論じている。その中で、歌学古典研究の深化、宮廷文化の一つの歌道の伝統を保持するために書院や茶席に古筆を掛ける志向が高まったことに言及している。さらにそのために古筆を仙洞に留め置いたことを指摘された。これは、谷端氏の論の裏付けとなる。また酒井氏は、茶道、花道、歌学の講釈の根底を支えたものが禁裏文庫であったとする。そこには空海や小野道風などをはじめとする数々の名筆が収蔵されていたのだから書においても一概ではない。なお、禁裏文庫については、田島公氏編『禁裏・文庫研究』第一輯―第六輯（思文閣出版、二〇〇三年―二〇一七年）が刊行され、その

内容や変遷が明らかになっている。

酒井氏は、天皇家のなかで最も『源氏物語』の研究が盛んにおこなわれた後水尾院の時代に着目し、古典研究や教育の実相についても論じている。酒井氏は、通村によって行われた『源氏物語』切伝授を後水尾院が深化させていったと結論付ける。

古典籍研究に励んだ上堂歌壇によって幹旋、詞書書写された調度手本からは、和歌や古典籍研究が他の分野にまで広く及んでいたことが分かる。例えば、通村が幹旋した『源氏物語手鑑』（和泉市久保物記念美術館蔵）や、『源氏物語画帖』（京都国立博物館所蔵）などがある。禁裏での蔵書や古典籍研究は、鑑定や手習いとしての教養となったのとは言うまでもない。

書道研究において、後水尾院サロンで行われた文化活動に着目されることは少なかった。しかし、概観して確認されるように後水尾院サロンで行われた書にまつわる活動は、手習い、歌会における懐紙や短冊揮毫、歌書の書写、模写、調度手本制作、書跡の幹旋や贈呈、鑑定、表装、鑑賞といった様々な場面が複雑に混在していた。

第二章 中院通村

通村は、中院通勝（一五五六―一六一〇）の子で極官は正二位内大臣である。細川幽齋（一五三四―一六一〇）から古今伝授を受けた父の通勝に歌学を学び、慶長十五年（一六一〇）に幽齋と通勝が死去して以降は、三条西家から学びを受けた。歌道の家に育った通村は、慶長十九年（一六一四）より後水尾院御製の添削にあたって、三条西実条（一五七五―一六四〇）、光広とともに指導者となる。その目立った活躍には、元和元年（一六一五）の水尾院の母にあたる近衛前子（一五七五―一六三〇）、徳川家康（一五四三―一六一六）への『源氏物語』の講釈などが挙げられる。寛永二年（一六二五）には、『伊勢物語』を後水尾院

へ講釈し、寛永十五年（一六三八）に光広、寛永十七年（一六七〇）に実条が死去して以降は、後水尾歌壇の第一人者として指導する立場につくなど、江戸時代初頭の宮廷歌人の代表であった。

通村の書の活動は歌人としての活動に準拠したものといえよう。したがって、まずは歌人としての通村にまつわる先行研究を確認していきたい。

後水尾院の文化活動、主に歌道を語ろうとする際、通村の存在は欠かせないのである。本田氏「後水尾院の禁中御学問講」では、「禁中御学問講」で行われた『源氏物語』や『伊勢物語』の講釈が行われた月日や参加者がまとめられているが、その指導者として通村の存在が大きく取り上げられている。また、酒井氏『禁裏本歌書の蔵書史的研究』では、通村の『源氏物語』の講釈が交合や読合と並行して行われていることが指摘されるなど、禁裏文庫史との関連からその動向が明らかにされる。さらに、天皇・院の古典研究や教育の実相を明らかにする目的として『源氏物語』切伝授の歴史を跡付け、通村に源氏学を学んだ後水尾院がそれを継承して深化させていったと結論付ける。

高梨氏「後水尾院初期歌壇の歌人の研究」は、後水尾歌壇における通村が行った活動についてまとめられており資料性が高い。氏は、和歌の講釈や古典籍の研究、添削指導の内容を時期区分し特徴づけ、通村の歌壇での存在が主要なものであったことが明白化された。

このほか、鈴木氏「後水尾歌壇の成立と展開」、大谷氏「和歌文学講座第八巻 近世の和歌」、日下氏「後水尾院の研究」などにおいても、後水尾院との関係から通村の後水尾歌壇での役割や立場が述べられる。

以上のように、通村は歌道研究において後水尾歌壇を語ろうとするとき、その要として主要な立場に位置付けられてきた。通村の書をめぐる活動を確認するにあたって、歌人としての姿が欠かせない。

これらをふまえて、通村の書の活動にまつわる先行研究を概観したい。書道研究では、通村に関するまとまった資料が示されてきていない。断片的な資料から

通村の書にまつわる活動について確認したい。

小松氏『日本書流全史』上に所収の書流系譜では、「本朝古今名公古筆諸流」、「筆跡流儀系図」、「流儀集」、「古筆流儀別」で世尊寺流、「本朝古今名公古筆諸流」、「筆跡流儀系図」、「流儀集」、「古筆流儀別」、「古筆流儀分」で中院流の当主として名が掲載される。⁷⁾ 同じく『日本書蹟大鑑』第十六卷(講談社、一九七八年)には通村の短冊や和歌懐紙が掲載されている。小松氏は主に中院流の高手として取り上げ、その書風に考察を加えながら書写年代について言及した。

次に、古筆の補写や模写本、調度手本にまつわるものを確認したい。

まず、前述した伝藤原公任筆「十五番歌合」(前田育徳会蔵)は、不足分の二十二首が通村によって補写されたものであることが知られる。⁸⁾ 『墨美』一八八号(墨美社、一九六九年)では通村による「十五番歌合」(個人蔵)の模写本も紹介された。そのなかで助弘倫子氏は大名家に伝わったものと推測し、「模本」といつても「臨模」という意義で行われたものとしている。⁹⁾

『源氏物語手鑑』(和泉市久保物記念美術館蔵)は、石川主殿頭忠総(一五八二—一六五二)の依頼で通村が幹旋とコーディネートを行い、上堂歌壇によって詞書が分担書写、絵を土佐光吉(一五三九—一七二三)が描いたものであることが明らかにされるとともに、¹⁰⁾ 通村の幹旋者としての顔も明白となった。さらに調度手本の内容が『源氏物語』という点では、後水尾歌壇における古典籍研究の指導者としても通村の姿が象徴されたものとなっているのではないか。

近年、浜野真由美氏「東京国立博物館所蔵『調度手本』の成立事情…『西笑和尚文案』を手掛かりに」(『MUSEUM』六七二号、東京国立博物館、二〇一八年)では、後陽成天皇、八条宮智仁親王、信伊の五巻の調度手本の成立事情について、加賀大聖寺主山口宗永(一五四八—一六〇七)の依頼によるもので、相国寺九十二世の西笑承兌(一五四八—一六〇七)の幹旋によって染筆されたものであることが明らかにされた。また、後陽成天皇については信伊が幹旋し、調度手本の回収や装丁は連歌師の是齋(生年未詳—一六〇九)があたったことを述べ

る。通村らによって書写された調度手本の制作過程は、こうした調度手本とも近似している。

通村は、古筆鑑定においても度々取り上げられてきた。前述のとおり、伝藤原行成筆「関戸本古今集」の零本(個人蔵)には、通村による鑑定の奥書があることと知られる。また、通村の日記『中院通村日記』は、江戸時代初頭の古筆鑑定や古筆交流などを示す資料として用いられてきた。その一部を取り上げると、『中院通村日記』元和二年(一六一六)年正月三十日条には、了佐の手鑑を見た通村が驚目したことが記される。こうした通村の古筆鑑定や交流に関する記載は、書道研究において度々取り上げられてきたが、近世初頭の古筆鑑定や古筆流儀を示すものとして用いられた傾向が強く、通村に焦点を宛てたものとは言い難い。

以上、通村の書にまつわる先行研究を概観してきた。これらから確認されるように、通村は歌人として短冊や懐紙の揮毫、禁裏での書写活動、古筆の補写、模写、調度手本の書写、幹旋、古筆鑑定など多種多様な書の活動を展開しており、江戸時代初頭の書道史において欠かせない人物である。通村の書の活動は、後水尾歌壇での活動と密接に関わっている。通村を定座することによって、通村の書道史上での重要性が明白となるほか、通村を通して後水尾サロンで行われた書にまつわる活動、公家と武家、町人、僧侶らとの交流のなかでの書の需給の様相の一端も明らかになっていくものと考えられる。

第三章 藤谷為賢

為賢は、上冷泉家九代当主・冷泉為満(一五五九—一六一九)の次男として生まれた。冷泉為相(一二六三—一三二八)の別姓である藤谷を家名として、歌道家職とする藤谷家の祖となった人物である。¹¹⁾

藤谷としての為賢の名が最初に見えるのは山科言緒『言緒公記』慶長十七

年（一六一二）正月十五日条で、十八日に行う左義長竹持参についての触宛名に「藤谷侍從殿」とある。『公卿補任』によると、従三位となるのは寛永九年（一六三二）であるから昇進は早かったと言いがたい。

ここで為賢に関する先行研究を概観することにした。

書の先行研究においては、定家流の人物としてその名が紹介されるものの、遺墨が取り上げられることは少ない。小松氏『日本書流全史』上では、定家流の系譜に連なる人物として紹介され、同著の書流系譜によると「本朝古今名古筆諸流」、「流儀集」、「古筆流儀別」、「古筆流儀分」において定家流の覧に名が確認される。小松氏『日本書蹟大鑑』第十九卷（講談社、一九七九年）では、定家流で書かれた短冊が資料として示され、「その字形や書風に定家流の影響が著しい。やはり当時、名うての定家流の名手であったのだろう。」と能書として評価されている。また、展覧会図録「定家様」（五島美術館、一九八二年）は、定家流の人々を一同に集めたものだが、そのなかで為賢は細身の定家様と紹介されている。小松氏『古筆』では、為賢の行った古筆鑑定について触れられるものの、定家流流行を取り上げたものとして取り上げられた傾向が強い。このように、書の先行研究においては主に定家様を書く人物として取り上げられる程度に留まり、それ以上言及されることはなかった。

歌に関する先行研究では、久保田啓一氏『近世冷泉派歌壇の研究』（翰林書房、二〇〇三年）などで上冷泉家の分家として紹介されている。しかし、父の為満に関しては、「昵懇公家衆」の一人として数えられ、家康に古今伝授を行うなどの目立った功績が取り上げられる一方で、為賢に関しては紹介される程度に留まっている。

こうしたなか、為賢についての主要な先行研究として挙げられるのは、川島将生氏『室町文化考論―文化史のなかの公武』（法政大学出版局、二〇〇八年）である。川島氏は、寛永期の文化の具体的な事象を蓄積するための一作業として為賢を取り上げ、『隔冥記』に見える承章との交流、『大覚寺文書』に見える為賢の

行動を分析している。そこで見出されたのは、古筆の鑑定や斡旋、値段の決定、あるいは掘り出しなど、歌人や目利としての架け橋となる為賢の姿であった。また、それは茶道具に対しても確認された。川島氏は寛永文化の中での為賢の存在を了佐と同等に位置付けられている。

ここで『大覚寺文書』を確認することにした。門跡寺院であった大覚寺に残されている『大覚寺文書』は、基本的に年紀がないが、ほとんどが江戸時代初頭の門主であった空性（一五七三―一六五〇）、尊性（一六〇二―一六五二）、性真（一六三九―一六九六）に宛てられた書状である。差出人のほとんどが皇族や公家であり、武家などの文化人も加わる。通村、日野弘資（一六一七―一六八七）、近衛尚嗣（一六二二―一六五三）らの書状も確認することができ、後水尾サロンの文化活動を探る上でも格好の性質を持っている。この『大覚寺文書』には為賢の書状が七十三通含まれているのである。

以上のように、為賢は後水尾サロンにおける書にまつわる活動、主に古筆交流において主要な人物であったことが伺える。しかし、それが書道史研究において位置付けられることはなかった。川島氏の研究では、古筆鑑定や斡旋などが取り上げられるに留められているが、氏の先行研究を下地に書道研究の側面から、『隔冥記』や『大覚寺文書』に見える為賢の書をめぐる活動、あるいは鑑定の添状など資料一つ一つを丁寧に掘り下げていくことによって、書文化形成の担い手としての為賢の姿とその存在の重要性を明白にすることができると考える。

また、冷泉家では、定家と俊成とともに「歌聖」と称し、その典籍類は学問の対象となった。歌の詠みや披講、作法のほか、定家流が学習の対象となり、定家流は和歌を書く際の型であったことは言うまでもない。このような家に生まれた為賢による前述の活動をとらえようとした時、この時代の定家流流行の中心人物としての姿を導き出すことも可能であろう。

おわりに

本稿では、後水尾サロンの構成員に着目し、これまで大きく取り上げられることなく見過ごされてきた通村と為賢を取り上げ、主な先行研究を概観してきた。

それにあたって、書道研究で述べられることのなかった後水尾サロンと、そこで行われた書をめぐる活動を後水尾院の文化活動から概観した。そこでは、後水尾院を中心に行われた文化活動、特に歌と茶と複雑に絡み合って展開されていくという側面が確認された。特に、後水尾院が最も重視した歌道は、江戸時代初頭の古筆愛好の起因の一つと考えられる。

これを踏まえて通村、為賢に関する主な先行研究を取りまとめた。その結果、通村と為賢は後水尾サロンにおける書の活動でそれぞれ重要な役割を果たした人物であるにも関わらず、書道史研究では見過ごされてきたことが浮き彫りとなった。

通村の書にまつわる活動は、先行研究で確認されるように、短冊や懐紙の揮毫、禁裏での書写活動、古筆の補写、模写、調度手本の書写、斡旋、古筆鑑定など様々である。特に伝藤原公任筆「十五番歌合」（前田育徳会蔵）の二十二首の補写や、伝藤原公任筆「十五番歌合」の模写本（個人蔵）制作を例にみるような古筆の補写や模写は、助弘氏が指摘するように「臨模」という意識が働いており、不足分の書写だけでなく、調度手本の姿を保とうとする姿勢や、世尊寺流名手としての姿も浮かび上がってくる。また、調度手本「源氏物語手鑑」（和泉市久保惣記念美術館蔵）は、その時代の古典籍研究が幅広く及んでいたということ、何よりも源氏学の第一人者であった通村が斡旋しデザインを施すことに価値があったものではないだろうか。古筆鑑定もしかり、歌人としての鑑識の表れである。

通村の存在は書道研究において見過ごしてはならない存在である。多様な場面でのその筆跡や書写態度に関する検討を行うことによって、能書としての通村

の姿を明瞭に浮かび上がらせることが可能となると思われる。『中院通村日記』や、筆跡などこれまで積極的に取り上げてこられなかった資料に目を向けて通村の書の活動を明らかにしていく必要性を指摘したい。また、公家と武家、町人、僧侶らとの交流のなかでの書の需給の様相の一端が通村を介して見えてくるものと思われる。

為賢は後水尾サロンにおける古筆交流、主に古筆鑑定、斡旋、掘り出しの行為、値段の決定などにおいて重要な人物であった。それは『隔冥記』や『大覚寺文書』といった資料の特質からも明らかである。また、上冷泉家に生まれた為賢の活動からは、定家流流行を促した人物像も浮かび上がる。為賢は、公家として身分も高くなく、比較的自由な交流が可能であった。そうした意味では、公家や武家、町人や僧侶といった多くの階層のパイプとして、古筆交流や定家流流行を促した人物と考えられる。川島氏の先行研究を下地としながら書道史研究の側面に立ち、『隔冥記』や『大覚寺文書』に見える為賢の書の活動、あるいは鑑定の添状など資料一つ一つを丁寧に掘り下げていくことによって、為賢の存在の主要性を書道史に位置付けられるものと考ええる。

以上、ここまで主な先行研究を整理し、その問題点や研究課題を示した。今後研究を進めていくことにより、通村と為賢の書をめぐる活動が明らかになるとともに、江戸時代初頭の文化形成の中心であった後水尾サロンにおける書の実態の様相を示すことが可能であると思われる。

注

(1) 川島将生『中世京都文化の周縁』（思文閣出版、一九九二年）、熊倉功夫『熊倉功夫著作集』第五卷「寛永文化の研究」（思文閣出版、二〇一七年）などの文化研究で用いられている。

(2) 熊倉功夫、前掲『熊倉功夫著作集』第五卷（寛永文化の研究）四頁。

(3) 第一カ条である「禁中御学問講」には「天子諸芸能之事、第一御学問也」

とある。

館、一九九二年)による。

(4) 熊倉功夫、前掲『熊倉功夫著作集』第五卷(寛永文化の研究)一一〇—一二二頁)

(11) 『姓氏家系大辞典』には「藤原北家御子左流相模国鎌倉郡藤谷より起る」とある。(太田亮『姓氏家系大辞典』角川書店、一九七三年)

(5) 八歳のおり西洞院時慶(一五五二—一六四〇)を「御手習師範」としたごと、二十三歳のおりに中院通村(一五八八—一六五三)らと「御手習講

(12) 小松茂美、前掲『日本書流全史』上巻(三九三—四四六頁)

始」を行ったこと、このとき時慶が「尊鎮流」、通村は「中院流」の系譜上に位置付けられていることが挙げられ、後水尾院の書が広い意味での「御

(13) 小松茂美『日本書蹟大鑑』第十六卷(講談社、一九七八年、二三三頁)

家流」の下地の上に「中院流」の影響を受けていると指摘した。また、

(14) 為満の事歴については、久保田啓一『近世冷泉派歌壇の研究』(翰林書房、二〇〇三年)、大谷俊太「付論—冷泉為満と徳川家康—古今伝授の意味」

二十六歳のおりに良如法親王(一五七四—一六四三)から「能書方七箇条」

(『和歌史の「近世」道理と余情』ぺりかん社、二〇〇七年)を参考にした。

の伝授を受けたことを挙げている。(田中潤「親王・門跡の家職としての書

小松茂美、前掲『日本書流全史』上巻では定家流として取り上げられる。

道」『近世の天皇・朝廷研究—第一回成果報告集—』朝暮研究会、二〇〇八

高橋利郎「新出の模写本『熊野懐紙(河辺落葉・旅宿冬月)』と徳川家康における藤原定家の筆跡愛好について」(『大東書道研究』第二十四号、大東

年)

文化大学書道研究所、二〇〇七年)には為満と徳川家の関係について述べ

(6) このほか日下幸男「中院通村歌風」(『国語国文』五六 中央図書出版、

一八九七年)、「中院通村年譜稿—中年期(上)」(『龍谷大學論集』四八 龍

谷大學国文学会、二〇〇三年)などがある。

(15) 久保田氏は、江戸初期の上冷泉家は後水尾文化圏の歌壇において目立った

(7) 小松茂美『日本書流全史』上巻(講談社、一九七〇年、三九三—四四六頁)

働きをしておらず、為満から冷泉為綱(一六六四—一七二二)にかけての

(8) 『墨美』一八八号(墨美社、一九六九年)では、通村による模写本の「十五

事跡が空白に近いという指摘をする。(久保田啓一、前掲『近世冷泉派歌壇

番歌合」がはじめて掲載された。また伝藤原公任筆「十五番歌合」零卷(前

の研究』、三五—四〇頁)

田育徳会所蔵)の制簡の表にある「十五番歌合公任筆書洞内府」という彫

主要参考文献

刻から、不足分の補写を通村が行ったことが知られる。(『十五番歌合』尊

・東伏見宮家編『皇室史の研究』東伏見宮家、一九三二年

経閣叢刊』育徳財団、一九三二年。小松茂美『古筆学大成』第二十一卷、

・慶恵集・尊経閣叢刊』育徳財団、一九三二年

講談社、一九九二年)

・中村直勝『後水尾天皇御紀』旧嵯峨御所大本山大覚寺、一九五一年

(9) 助弘倫子「新出の十五番歌合模本とその文学的価値」(前掲『墨美』一八八

・『墨美』一八八号、墨美社、一九六九年

号、二九頁)

・小松茂美『日本書流全史』上下巻、講談社、一九七〇年

(10) 山根有三「土佐光吉とその関屋・御幸・浮舟図屏風」(『国華』七四九、七五〇

・小松茂美『古筆』講談社、一九七二年

号(国華社、一九五四年)、『源氏物語手鑑研究』(和泉市久保惣記念美術

・本田慧子「後水尾院の禁中御学問講」『書陵部紀要』第二十九号、宮内庁書陵部、

一九七八年

・小松茂美『日本書蹟大鑑』第十六卷、講談社、一九七八年

・小松茂美『日本書蹟大鑑』第十八卷、講談社、一九七九年

・小松茂美『日本書蹟大鑑』第十九卷、講談社、一九七九年

・『大覚寺文書』上下巻、大覚寺、一九八〇年

・小松茂美『日本の書』一〇「寛永の三筆」中央公論社、一九八一年

・小松茂美『烏丸光広』小学館、一九八二年

・『定家様』五島美術館、一九八二年

・鈴木健一「後水尾歌壇の成立と展開」『国語と国文学』東京大学国語国文学学会、一九八六年

・日下幸男「中院通村歌風」『国語国文』五六、中央図書出版、一九八七年

・小松茂美『古筆学大成』第一巻、講談社、一九八九年

・川島将生「中世京都文化の周縁」思文閣出版、一九九二年

・『源氏物語手鑑研究』和泉市久保惣記念美術館、一九九二年

・小松茂美『古筆学大成』第二十一巻、講談社、一九九二年

・増田孝『日本近世書蹟研究史』文献出版、一九九六年

・大谷俊太『和歌文学講座』第八巻「近世の和歌」勉誠社、一九九六年

・酒井信彦「後水尾院当時に中行事」の性格と目的』『東京大学史料編纂所研究紀要』七、東京大学、一九九七年

・田島公編『禁裏・文庫研究』第一輯―第六輯、思文閣出版、二〇〇三年―二〇一七年

・久保田啓一『近世冷泉派歌壇の研究』翰林書房、二〇〇三年

・日下幸男「中院通村年譜稿―中期(上)」『龍谷大學論集』四八、龍谷大學国文学会、二〇〇三年

・谷端昭夫『公家茶道の研究』思文閣出版、二〇〇五年

・『藻塩草』淡交社、二〇〇六年

・大谷俊太『和歌史の「近世」―道理と余情』ぺりかん社、二〇〇七年

・高橋利郎「新出の模写本『熊野懐紙(河辺落葉・旅宿冬月)』と徳川家康における藤原定家の筆跡愛好について」『大東書道研究』第二十四号、大東文化大学書道研究所、二〇〇七年

・川島将生『室町文化論考―文化史のなかの公武』法政大学出版局、一九九二年

・田中潤「親王・門跡の家職としての書道」『近世の天皇・朝廷研究―第一回成果報告集』朝幕研究会、二〇〇八年

・酒井茂幸『禁裏本歌書の蔵書史的研究』思文閣出版、二〇〇九年

・熊倉功夫『後水尾天皇』中央公論社、二〇一〇年

・高梨素子『後水尾院初期歌壇の歌人の研究』おうふう、二〇一〇年

・高田智仁「江戸時代日記史料にみる近世宮廷社会の古書跡の諸相」『公益財団法人日本習字教育財団学術研究助成成果論文集』第一号、日本習字教育財団、二〇一五年

・日下幸男『後水尾院の研究』勉誠出版、二〇一七年

・熊倉功夫『熊倉功夫著作集』第五巻「寛永文化の研究」思文閣出版、二〇一七年

・増田孝・日比野浩親編『慶安手鑑』思文閣出版、二〇一七年

・浜野真由美「東京国立博物館所蔵「調度手本」の成立事情」『西笑和尚文案』を手掛かりに』『MUSEUM』六七二号、東京国立博物館、二〇一八年